

元陸自幹部・看護師 足寄に老人ホーム開設

【足寄】元陸上自衛隊幹部で、看護師として海外にも派遣された縁談を持つ鐘ヶ江（かねがへ）紗里さん（36）。今年7月、足寄町内で住宅型有料老人ホーム「アニカ足寄」をオープンさせ、末期がんや神経難病など、医療依存度が高い入居者に寄り添う毎日を送る。自衛官時代の病院勤務や海外派遣、退官後のアフリカでの経験などを踏まえ、たどり着いた足寄の地。「自分らしく生きる」を支える」とする使命を、全うする覚悟だ。（北雅貴）

鐘ヶ江紗里さん(36)



国際緊急援助隊の一員としてネパールに派遣された鐘ヶ江さん。「何もできなかった」との思いが新たな進路の契機になった

残された時間を「自宅のように」

残された時間を自宅に近い環境で過ごすことができる介護施設で、最大28人が入居可能だ。

「アニカ足寄」は、町中心部の「在宅療養支援診療所」ホームケアクリニック（町南5ノ3）の「自分の家のように感じてほしい」との思いも込め、2階にある。末期がんや難病を抱える患者らが、残さず好きな洋服や食器、座布団

などの持ち込みも可能。訪問看護と訪問介護の事務所も併設され、夜間も看護師や介護士がいるため、ペットを含む面会も、24時間365日受け入れる。

オープンから2カ月が経たないが、町外の病院などには入院していた足寄町民らが「里帰り」して、入居する卒業後、経済的事情から、

2007年に自衛隊中央病院高等看護学院（東京）に入隊した。3年後には一般患者も受け入れている同病院内に配属。看護師として集中治療室（ICU）で勤務した。

ICUでは頻りに訪れる患者の死。先輩に「人の死に慣れるのが怖い」と泣いて訴えたが、

「縁もゆかりもない地域だが、挑戦しよう」。今年3月にアニカホスピス株式会社を設立。十勝総合振興局や足寄町、とかち広域消防局などの協力を得て「異例の速さ」となる7月中旬に、開設にこぎ着けた。

同社では、岩淵寛太郎さん（41）も、経理面などで支える。伊藤忠商事などで勤務していた岩淵さんは、シエラレオネ共和国で、ゼロからパイナップル畑や加工工場を作った経験を生み、地域コミュニティを激変させた経験もある。

「営利企業という言葉は大嫌いだ。株式会社は金もうけが目的ではなく、事業目的を達成するための組織にすぎない。営利はただの継続の手段であるべきだ」。鐘ヶ江さんに負けない強い信念を持つ。

オープンから2カ月が過ぎ、運営も軌道に乗り始めた。池田理事長は「高齢者のケアと緩和ケアのメインドを受け継いでもらえる。組織形態が違っても信頼している」と話す。鐘ヶ江さんは「微力だが、足寄や十勝の地域医療や福祉のお手伝いができればうれしい。（終末期患者らの）選択肢の一つになれば」。穏やかな笑顔を見せる。

海外派遣、災害看護学

経験重ね「地方で挑戦」

て訴えたが、「あなたが一生懸命に見ていたら、その人は最期の最期まで生きられる」と言われて、はっとした」と述懐する。

15年には、大地震のあったネパールに国際緊急救助隊の一員として派遣。「世界政治の中で、日本の立ち位置や、自衛隊がどのような支援をできるかを知らない若造だった。何もできなかった気持ちが大きかった。無力さを感じた。ネパールでの経験が契機になり、「国際支援や世界での医療を学ぼう」と、18年に幹部の2尉の地位を捨てて陸自を退官。東京医科歯科大学保健衛生学研究所で5年間、災害看護学を専攻した。

シエラレオネは生と死が身近に。そして、18年から23年までの間、3回にわたり、研究や国連世界食糧計画（WFP）緊急支援チームのインタニンシップで、西アフリカのシエラレオネ共和国に滞在。首都フリータウンから、車で5〜6時間離れた地方の村に入り込み、現地の人と暮らした。

同国は小さな貧しい国で、平均寿命も短く、ICUと同様に生と死が身近で「考えさせられることが多かった」。赤ちゃんは住民

全員で祝福し成長を見守る。一方、栄養失調や感染症などで亡くなる人もいた。驚いたのは葬式だった。「結婚式と間違っだらいい華やかだった。お金のあふ人がご飯やお酒、ジュースなどを買い、お金のない人は歌や踊りを披露する。みんなが故人の思い出を話している。村人全員が笑顔で送る。人生に対する敬意と祝福があふれている」

23年に同大同研究科博士課程修了。国内、特に地方に関心が高まった。「世界に類を見ない保険制度が整



今年7月に住宅型有料老人ホーム「アニカ足寄」をオープンした鐘ヶ江さん。「自分らしく生きる、を支える」をミッションに掲げる



鐘ヶ江さんは西アフリカのシエラレオネ共和国で、現地の人々と交流しながら研究を重ねた

「電子版に関連記事」

「電子版に関連記事」

「電子版に関連記事」

「電子版に関連記事」